

ミニトマト(ハウス長期穫り)

栽培暦

月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
作型										
ハウス長期穫り	播種	鉢上げ	接木	定植		収穫肥	追肥	追肥	追肥	追肥

栽培の特徴とポイント

5月中旬定植の雨よけ1作栽培を基準として示した。水稻育苗ハウス等の有効利用としても活用し、長期収穫する作型とする。土耕が深く、排水のよいほ場を選定し、根張りをよくする。夏の高温期を経過することから、青枯病が発生しやすい。連作ほ場では土壤消毒や接ぎ木栽培が必要となる。

品 種

コ コ：果重は25～30gでミニトマトの中では比較的大玉である。花数は1花房当たり25～30花で、第3花房から栄養状態が良くなるとダブル花房となる。吸肥力が強く、草樹のやや強い品種である。タバコモザイクウイルス抵抗性はTm-2a。

千 果：果重は15～20gで下段から安定して糖度が高い。花数は1花房当たり30～40花で、低段はやや少なくなる。草勢はココよりおとなしい。タバコモザイクウイルス抵抗性はTm-2a型。

*連作する場合は青枯れ病を防ぐため、Bバリア、ベスパ等に接木する。

育苗管理

トマト(雨よけ普通)栽培を参照

栽培管理

1 定植準備

堆肥や石灰質肥料・リン酸質肥料を全面に施用し、できるだけ深耕する。全層施肥分の肥料を全面に施用して再度耕起する。

施肥例(kg/10a)

肥料の種類	総量	基肥	追肥				成分量		
							N	P	K
完熟堆肥	2,000	2,000							
苦土石灰	100	100							
熔成燐肥	80	80					16.0		
有機質肥料	150	150					9.0	9.0	10.5
緩効性肥料	80	60					8.0	8.0	8.0
高度化成	120	40	20	20	20	20	15.6	15.6	15.6
硫酸加里	20		5	5	5	5			10.0
合計							32.6	48.6	44.1

2 定植

- 1) 1本仕立ての場合は基本的には畝幅 1.3m × 株間 35cm = 2,000 ~ 2,300 株/10a、2本仕立ての場合は畝幅 1.3m × 株間 60cm = 1,200 ~ 1,500 株/10a とする
- 2) 定植前日までに十分かん水し、ハウスを密閉し地温を高めておく(15 以上必要)。
- 3) 定植当日は苗鉢に十分かん水し、晴天日の日中に定植する。鉢面と畝面が一致する程度の浅植えとする。定植後すぐに支柱を立てて誘引する。

3 わき芽かき

ミニトマトはわき芽の伸長が早く、放任するとすぐに過繁茂状態になり、病虫害や生理障害・落果の原因となる。このため、わき芽は順次小さなうちに指で引っぱりながら折って取る。ハサミなどを用いるとウイルスを伝染する恐れがあるのでなるべく使用しない。また、雨の日の作業はなるべく避け、傷口からの病原菌の侵入を防ぐ。樹勢が強すぎる場合には、しばらく放任する。

4 摘果

基本的にはこの作型での摘果作業は不要だが、果数が著しく多い果房の場合は50果程度に摘果する。

5 摘葉

主枝の摘心が終わってから、着色段位までの葉を摘葉する。草勢が弱いときは着色段の下に3枚残して摘葉する。目安として展開葉15~18枚に管理する。

6 着果促進

着果と果実の肥大を図るため、ホルモン処理やマルハナバチの利用を行う。方法はトマトと同様であるが、花数が多いので、数回に分けて処理を行う。1果房中の3~4花が開花した頃から、数日毎に1果房当たり3~4回処理する。

7 かん水

定植後活着までは、やや多めにかん水する。活着後の多かん水は過繁茂になりやすいので控えめにする。

1回目の追肥時期となる第1果房収穫期頃から徐々にかん水量を増やす。

8 裂果防止

- 1) 昼夜温の格差が出ると発生が多くなるので、気温が低下してきたら早めにハウスを閉める。
- 2) ハウス内の湿度が高くなると発生するので、一度に多量のかん水をしない。夕方のかん水、薬剤散布をしない。

9 追肥

第1果房収穫始めから追肥を行い、20~30日に1回施用する。追肥量は化成肥料で窒素成分3~4kg/10aを畝肩に施用、液肥の場合は1kg/10aまでとする。トマトは、カリを多く吸収するので、窒素量より3~4割多めに追肥する。葉縁が黄褐色に退色したり、枯れ込む兆しがあるときはカリの肥効が低下している。

10 収穫・調製

- 1) 収穫：開花後40~50日で収穫期となる。果実全体が十分に着色したものを朝の涼しいうちに順次収穫する。熟しすぎると裂果が多くなり、へたがとれやすいので注意する。
- 2) 調製：がく取れ果、裂果に注意して、規格別に選別・箱詰めする。

病虫害防除

灰色かび病・葉かび病：ハウス内の排水・通風を良好にし、湿度を上げないようにする。予防防除に努め、発生初期からの防除を徹底する。

うどんこ病：乾燥しすぎないように適度なかん水を行う。治療効果の高い登録農薬がないので、予防散布を徹底する。

販売のポイント

近年、比較的高値で推移しているため、高品質な果実の長期安定生産に努めるとともに、選別を徹底して地元生産の有利性を発揮する。